

【資料紹介】

伊都国歴史博物館所蔵の弥生～古墳時代木器

—池田中上町・大五郎遺跡、本田孝田遺跡出土木器—

岡部 裕俊（伊都国歴史博物館）

1. はじめに

近年、糸島地方では、低湿地における発掘調査事例が増加し、これとともに縄文～中世・戦国期にかけての木器の出土事例も増加傾向にある。現在、筆者が把握しているだけでも32箇所（第1図、表①）に及び、多くの遺跡で多様な木器の出土が報告されている。

従来は、生活用具の出土例が中心であったが、近年では、元岡・桑原遺跡（福岡市西区）で製鉄関連遺構群が発見されたことに伴い、近隣で木簡が出土し（註1）、また、近接する泊桂木遺跡でも7～8世紀の木簡が出土する（註2）など、文字史料も絡めて学術研究上の新たな課題を投げかけた貴重な資料も発見されている。

なかでも、弥生時代～古墳時代にかけての遺跡では、土器溜りなどから大量の有機質遺物が出土することも少なくなく、上籴子遺跡（糸島市）（註3）、今宿五郎江遺跡（註4）、元岡・桑原遺跡（註5）（以上福岡市）などでは、弥生時代中期後半～後期にかけての木器が多量に出土し、当該期における生活実態を解明する上で貴重な情報を提供しており、今後の調査・研究の進展も期待されているところである。

さて、伊都国歴史博物館では、糸島市内の発掘調査で出土した資料のうち、保存処理が完了した木製品を順次、収納保管しており、平成27年度末までに収納した木製品の数は約2,000点にのぼる。

このなかには、発掘調査報告書の作成時に諸般の事情で報告に漏れた資料なども存在するため、これら資料の報告・周知化の取り組みは、博物館に委ねられることになる。

本項では、博物館で新たに収納した資料のうち、弥生時代～古墳時代の木器が出土した池田中上町遺跡、池田大五郎遺跡、本田孝田遺跡の出土木器を紹介し、資料公開の責務を果たすとともに、併せて、これらが出土した遺跡の性格などについて

も若干の検討を加えてみたい。

なお、報告文中に示した木器の樹種については、筆者の推定に留まることをお断りしておく。

また、今回紹介する資料のうち、本田孝田遺跡出土資料7、8以外は全て、平成16～19年度に本市教育部文化課文化財係の脇谷華代子（旧姓牟田・平成15～17年度）、三嶋直子（旧姓檜崎・平成18～19年度）両氏を中心となり、本市の直営で処理を実施したPEG含浸処理によるものである。両氏の献身的な取り組みによって腐朽の危機にあった多くの木器の保存が達成されたことを記して、感謝の意を表したい。

2. 遺跡と出土木器

（1）池田中上町遺跡

遺跡の概況

糸島市大字池田字中上町一帯に所在する遺跡で、瑞梅寺川右岸の標高12mほどの沖積微高地上に立地する。この遺跡は、福岡市との市境に位置しており、調査地点の東隣には縄文後期～弥生前期の遺構や遺物が出土した千里遺跡も立地している（註6）、本来は、市境をまたいで池田中上町遺跡と同一の集落遺跡と考えられる。

発掘調査は、国道202号線バイパス建設工事に伴い1990（平成2）年に実施され、概要報告書が刊行されており（註7）、土坑、溝、柱穴、自然流路などが検出されている。

特に、二本の自然流路（図版1-1）から、多量の流木とともに突帯文～板付Ⅰ式期の深鉢、浅鉢、甕、壺などの土器が出土した。他に石器、木器なども出土しておりその一つが諸手鋏であるが、これら遺物の時期も概ね出土土器の時期に収まるものと考えられる。



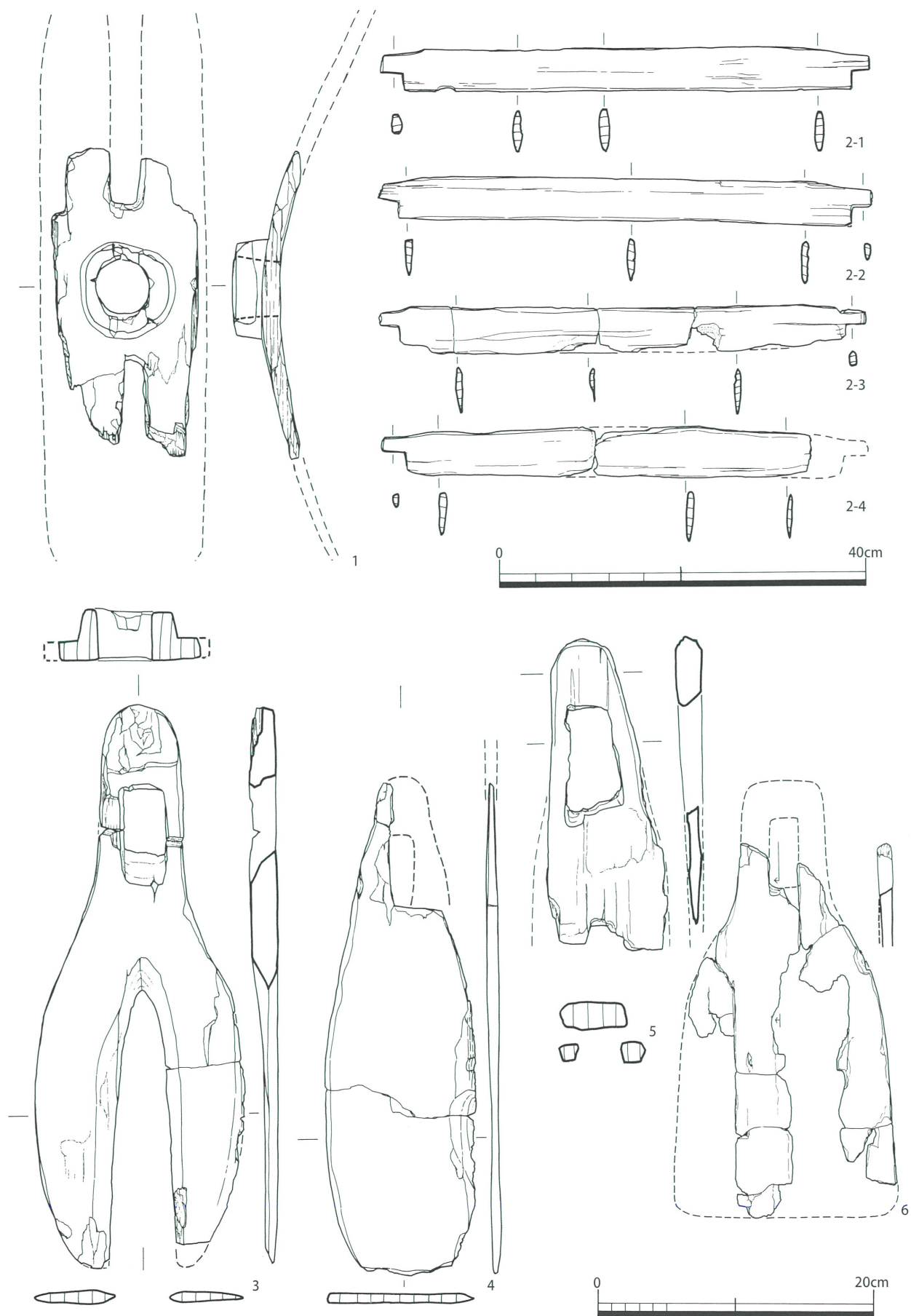
第1図 糸島地方における主な木器出土遺跡の分布

番号	遺跡名	時 代	主な木器	備 考
1	深江井牟田遺跡	弥生	椀、杓子、脚付盤、建築材	
2	深江中道遺跡	弥生早～前期	丸底ジョッキ形容器、板製品	竪穴状遺構
3	上深江小西遺跡	弥生	建物柱根	
4	石崎曲り田遺跡	奈良	井戸枠	
5	石崎大坪遺跡	弥生	矢板、平鋸、又鋸、矢板、井側、高床建物扉板	
6	石崎矢風遺跡		箱形容器、紡錘車、容器把手、他	水口、井堰
7	本田孝田遺跡	弥生後期	農具、食事具	
8	飯原門口遺跡	弥生	三又鋸片	弥生後期包含層 未報告
9	東下田遺跡	15～16世紀	舟形、漆塗り椀、鹿角他	未報告
10	釜塚古墳	古墳中期	石見形木製品、用途不明薄板	
11	荻浦坂の下遺跡	14世紀	大柱	
12	上籬子遺跡	弥生・古墳	農具、工具、運搬具、食事具、建築材、祭祀具	
13	篠原東遺跡群	12～15世紀	組合せ式木棺、木簡、漆器、曲げ物、竹籠、他	
14	潤寺丁田遺跡	古墳前期	脚付盤(脚部片とも)、杭、他	SD01
15	潤地頭給遺跡	弥生	農具、準備造船、他	
16	潤古屋敷遺跡	古墳、鎌倉	農具、梯子、下駄、桶、他	
17	潤番田遺跡	鎌倉～戦国	箸、下駄、桶、井戸枠、他	
18	井原丁ノ坪遺跡	古墳後期	袋状鉄斧柄、柱材、杭	
19	波多江遺跡	戦国時代	下駄、曲げ物、他	
20	池田井田遺跡	15世紀	建物柱根	
21	池田大五郎遺跡	古墳	農具	
22	池田中上町遺跡	弥生前期	諸手鋸	
23	高田チク遺跡	弥生前期	刻み梯子部材、柄	
24	高田遺跡群	弥生中期以降	又鋸、鋸柄、用途不明品、他	
25	怡土城跡	奈良～平安	下駄	濠
26	志登遺跡	鎌倉	漆器碗、櫛、紡錘車	
27	泊リュウサキ遺跡	奈良	井桁、木簡4枚、曲物底板他	井戸
28	一の町遺跡	弥生中期	拓鋸、斧柄、又鋸、容器、柱、礎板	
29	元岡・桑原遺跡群	弥生中期～後期	農具、工具、運搬具、食事具、建築材、祭祀具	
30	今宿五郎江遺跡	弥生	農具、工具、運搬具、食事具、建築材、祭祀具	
31	谷遺跡	弥生後期	鋸、鋸柄、アカトリ、杓子、ヤス、容器、建築部材他	
32	大塚遺跡	中世	小刀鞘、他	

文献(番号は、遺跡地名表の番号に対応)

1	古川秀幸 『深江井牟田遺跡』 1994 二丈町教育委員会
2-1	津國豊 『深江・中道遺跡』 1999 二丈町教育委員会
2-2	古川秀幸 『中道遺跡2』 2008 二丈町教育委員会
3	村上敦 『上深江・小西遺跡』 1998 二丈町教育委員会
4	古川秀幸 『石崎曲り田遺跡』 2005 二丈町教育委員会
5-1	橋口達也 『石崎大坪遺跡1』 1995 二丈町教育委員会
5-2	古川秀幸 『大坪遺跡2』 1995 二丈町教育委員会
6-1	古川秀幸 『石崎矢風遺跡2』 1997 二丈町教育委員会
6-2	古川秀幸 『石崎矢風遺跡』 2010 糸島市教育委員会
7	角浩行 『本田孝田遺跡・東スズ町遺跡』 1993 前原町教育委員会
10	岡部裕俊 『釜塚古墳』 2003 前原市教育委員会
11	岡部裕俊 『荻浦集落・祭祀・生産遺構編』 2008 前原市教育委員会
12	野田純子 『上籬子遺跡みえてきた伊都国人のくらし』 1995 前原市教育委員会
13-1	江野道和 『篠原東遺跡群1』 2017 糸島市岐養育委員会
13-2	江野道和 『篠原東遺跡群2』 2018 糸島市岐養育委員会
14	瓜生秀文 『潤寺丁田遺跡』 1992 前原町教育委員会
16-1	瓜生秀文 『潤遺跡群3』 2013 糸島市教育委員会
16-2	岡部裕俊 『潤古屋敷遺跡の古墳時代木器について』 『伊都国歴史博物館紀要12』 2017 伊都国歴史博物館
17	平尾和久 『潤遺跡群2』 2012 糸島市教育委員会
18	岡部裕俊 『井原丁ノ坪遺跡』 1991 前原町教育委員会
19	橋口達也 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』 1982 福岡県教育委員会
20	脇谷華代子 『池田井田遺跡』 2006 前原市教育委員会
21,22	角浩行 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概報』 1991 前原町教育委員会
23	岡部裕俊 『高田遺跡群1』 1986 前原町教育委員会
24	瓜生秀文 『JR筑肥線緑化用地内遺跡群』 2000 前原市教育委員会
25	鏡山猛 『怡土城址の調査他』 1937 日本弧文化研究所
26	林寛 『志登遺跡 第4次調査』 1985 前原町教育委員会
27	平尾和久他 『泊リュウサキ遺跡』 2009 前原市教育委員会
28	河合修 『一の町遺跡』 2009 志摩町教育委員会
29-1	菅波正人 『元岡・桑原遺跡群4』 2005 福岡市教育委員会
29-2	久住猛雄 『元岡・桑原遺跡群6』 2006 福岡市教育委員会
29-3	菅波正人 『元岡・桑原遺跡8』 2007 福岡市教育委員会
29-4	久住猛雄 『元岡・桑原遺跡群1』 2002 福岡市教育委員会
29-5	米倉秀則 常松幹夫 比嘉えりか 『元岡・桑原遺跡群23』 2014 福岡市教育委員会
29-6	米倉秀紀 『元岡・桑原遺跡群24』 2015 福岡市教育委員会
29-7	米倉秀紀他 『元岡・桑原遺跡群27』 2016 福岡市教育委員会
30-1	二宮忠司 『今宿五郎江遺跡 1』 1987 福岡市教育委員会
30-2	二宮忠司 『今宿五郎江遺跡 2』 1991 福岡市教育委員会
30-3	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 6』 2007 福岡市教育委員会
30-4	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 7』 2008 福岡市教育委員会
30-5	加藤隆也 『今宿五郎江遺跡 8』 2010 福岡市教育委員会
30-6	杉山富雄 『今宿五郎江遺跡 16』 2014 福岡市教育委員会
31	森本幹彦 『谷遺跡2・女原遺跡5』 2012 福岡市教育委員会
32	森本幹彦 『大塚遺跡5』 2012 福岡市教育委員会

第1表 糸島地方木器出土遺跡一覧表（遺跡番号は第1図位置番号に対応）



第2図 伊都国歴史博物館収蔵木器実測図1 (2は1/6、それ以外は1/6)

出土木器（第2図1 図版2-1）

1は、諸手鋏である。両端の刃部ともに大きく欠損しており、器表の劣化も進行しているが、柄孔の円形隆起が残存し、身の裏側に削り出されている。身部は残存長22.4cm、幅10.8cm、厚さは1.5cmほどで、柄孔隆起部の身厚は3.6cmである。

刃の形状について、現状では鋏面の両側とも二又状を呈しているが、図の上側では又分かれ部が身の中心を通り、端正な「コ」の字状を呈し、人為的な加工と考えられるのに対し、下側では、又別れ部の中心位置がやや右に寄っており、木器の表面に剥離欠損した痕跡が認められたことから、意図的な加工によるものではないと考えられる。このことから、諸手鋏の刃部は、平鋏と二又鋏の二通りに加工されていた可能性が高いと推定される。

る。

異なる刃をつくり出す諸手鋏の確実な例としては、下稗田遺跡（行橋市・註8）出土資料（第3図1）が知られるが、類例が少ない形態と言える。

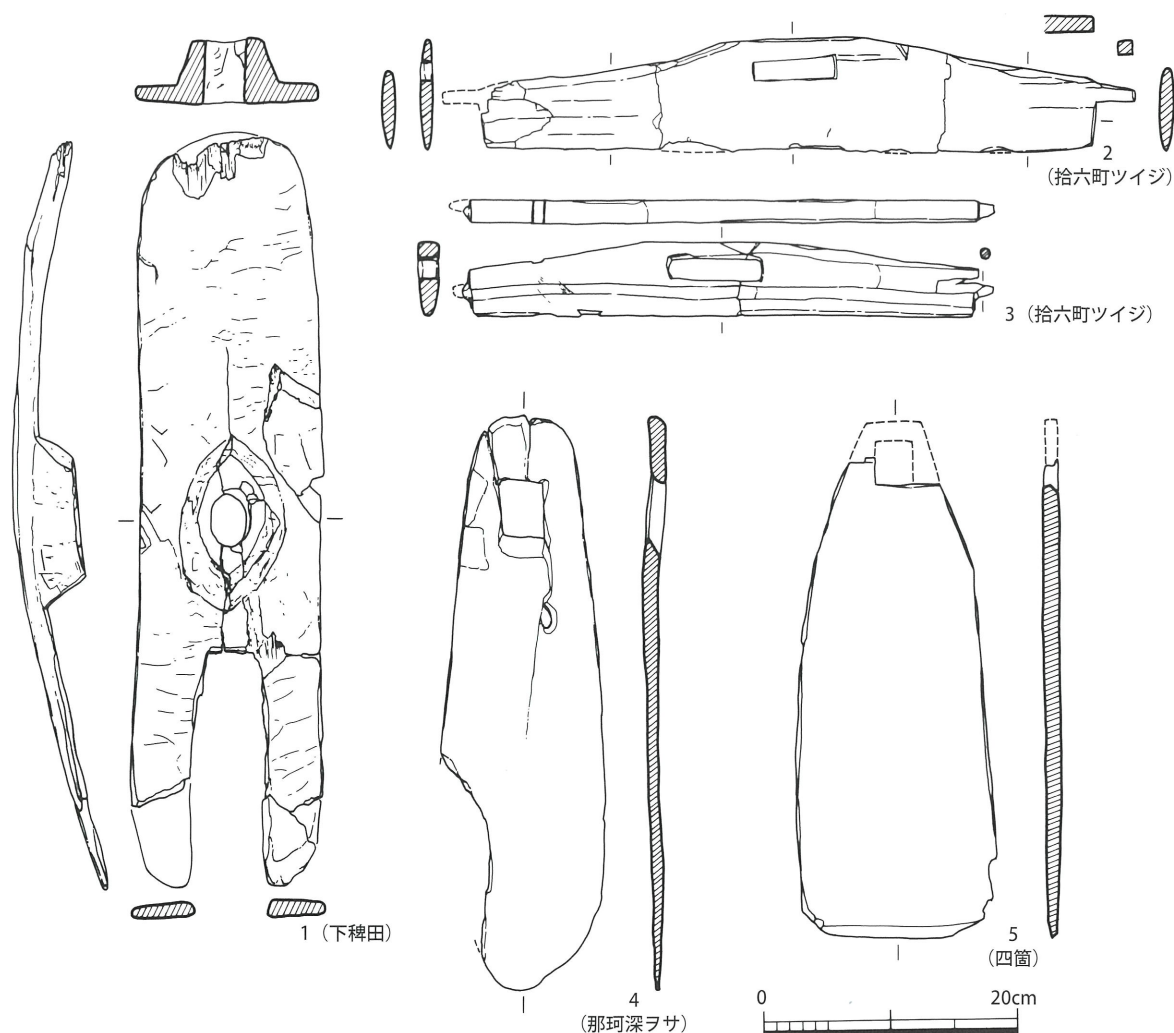
樹種はアカガシ亜属材の柾目取りである。

（2）池田大五郎遺跡

遺跡の概況

前出の池田中上町遺跡の西に隣接して位置し、国道202号線バイパス建設工事に伴う発掘調査で確認された（図版1-2）。

調査地点は、池田中上町遺跡と瑞梅寺川の氾濫原に挟まれた標高11mほどの沖積地で、調査地点中央部の微高地とその周辺から時期絞り込み、二重口縁甕、高坏、鉢などの土器が出土し、その周囲に黒灰色粘質土層が広がっていた。概要報告



第3図 参考木製品実測図（1/6）

書ではこの一帯が、古墳時代前期の水田であった可能性が指摘されており（註9）、黒色粘質土の上に砂層が堆積し、砂層によって埋没した足跡状の斑状の窪みが検出されているが、畦畔などは確認されていない。

本器は黒色粘質土層中から出土し、農具、矢板、杭など出土している。

②出土木器（第2図2～5）

2～5は、同形同大の板製品で、発掘現場では6枚がまとまって出土した（図版1-3）が、そのうち残存状態の良好な4枚を掲載した。

長さ54cmほどに切りそろえた幅4.2cm～4.8cm、厚さ9～1.2mmほどの薄い板材で、縁辺の一方の両端を浅く斜めに削いで傾斜をつけ、反対側の木口角をL字形に切り込んで長さ2.0cm、幅1.3cmほどの柄を削り出している。また、いずれも図の下辺を表裏から削り、刃状を呈している。

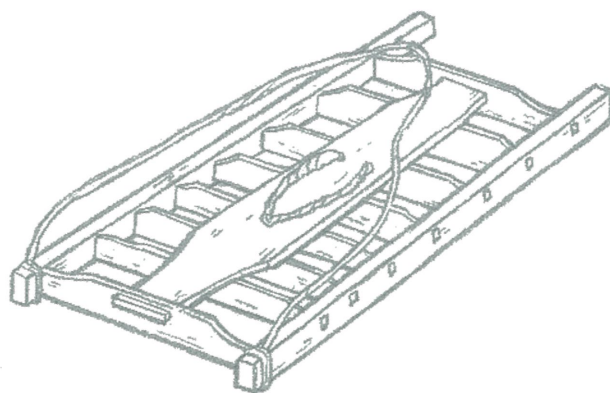
2、3はスギ、4、5はシイの柁目取り材が用いられており、形状、法量が似通っていることから規格性の強い組製品の構成材と考えられる。

この木器の用途については、近隣の遺跡で基本形状が似ている拾六町ツイジ遺跡（福岡市西区）（註10）出土の木器（第3図2、3）を参考にしたい。この木器は奈良時代の資料とされており、2は長さ51.6cm、幅9.1cm、3は長さ41.9cm、幅5.7cmを測る。板の両小口に柄を削り出し上辺の先端付近を斜めに削いでいる点、また、側縁の一方を表裏から刃状に削り出している特徴が共通している。

上原真人氏は、この木器を組合せ式田下駄（枠型田下駄）の横枰板と推定した（註11）。

拾六町ツイジ例では中央上部に長方形の柄穴があげられているが、これは、足板の両端を柄穴に嵌めて固定する機能を有すると考えられており、池田大五郎例にはこの柄穴がないため、枰の内側にわたされた横棧である可能性が高く、仮に出土した6枚の板が片足分の横棧とし拾六町ツイジ出土の板と組み合わせた姿を想像すれば、第4図のような形状が考えられる。

秋山浩三氏は、同種木器について「これまで考古資料「大足」の機能・用途として理念的に想定されてきた代踏み・均し、残程・緑肥踏み込み」用の農具と明確に規定している（註12）。このよ



第4図 池田大五郎遺跡出土板製品の使用状態の推定

うに規定した場合、横棧の下端が刃状に削り出された理由は、土壌を粉碎すると緑肥を水田中により深く鋤きこむための工夫であったのかもしれない。

3は、アカガシ亜属の柁目材と田にて二又鋤である。一方の刃の先端部を欠くが、ほぼ全形を知ることができる。全長40.8cm、幅15.4cm、最大厚2.0cmを測り、刃部は外縁側が外側に弧を描きながら膨らみ、又別れ部はV字に切り込む。柄頭は丸く整形され厚手であるのに対し、刃部は薄く成形されている。柄孔の着角度度は40度未満で鋭角になる。

4は、残存長35.8cm、幅11.2cmを測る板材で、アカガシ亜属の柁目材で製作されている。下辺が緩く「U」字状にカーブし、全体は細身の無花果状をなしている。現状では櫓のブレード部にも似ているが、厚さは4～8mmほどと比較的薄いことが櫓とすることには躊躇させる。

下端は何か打ち付けたことによりささくれたような状況を呈していることから平鋤の可能性もある。上部のL字の搔き込みは、出土状況写真（図版2-6）では破損した方形柄孔のようにも見える。この場合、平面形は那珂深オサ遺跡（第3図4・註13）、四箇遺跡（第3図5・註14）の平鋤などが本来の形状の参考になるかもしれない。ただし、このままの身幅で柄孔を復原しようとする、柄孔幅が極端に狭くなるが、右側面は刃状に再加工し、別用途に利用したのかもしれない。

このほか、前掲概報には残存状況が良好なアカガシ亜属製の一木造りの木製鋤の出土が報告されている（図版1-5）。掬い部にU字形鉄製鋤先を装着するための段を有する。

また、握り部は横木の手前で二又に分かれ、外形は半円形を呈している。横木は断面が円形で、又分れ部よりも厚く削り出され、さらに両側縁に向けて小さく突出するなど、丁寧かつ装飾的な要素が認められるのも特徴である。

しかし、この資料は平成6（1994）年の福岡大渇水期に資料保管水槽の水が枯渇する事故により収縮変形してしまった。

（3）本田孝田遺跡 遺跡の概況

本田孝田遺跡は、長野川中流左岸の段丘上、現在の堀(ほり)集落北端の標高16.5mの水田中に立地する弥生中期～古墳前期にかけての集落遺跡である。平成元年度に県道本・加布里線の改良工事に伴い発掘調査が行われた。

調査地点では、東から段丘面に向かって伸びる溝状遺構が確認され、大溝と報告されている。

大溝は、幅12mほど、平坦面をなす台地の縁辺から中心に向かって伸びている。大溝の断面は細かな凸凹をみせながら急勾配で下り、溝の底面は湧水層まで達しており、調査時でも常に湧水に悩まされた。報告書では自然地形の谷と推定されたが、人為的に掘削された遺構である可能性が高いと考えられる。

溝の底には、弥生中期末から後期初頭にかけての完形を含む大量の土器が出土したが、これをさかのぼる時期の遺物は含まれておらず、土器の投棄が突如開始されたことをうかがわせる。

また、土器の多くに口頸部の打ち欠きや、胴・体部の穿孔などが施されており、祭祀行為に伴って溝に投棄されたものと考えられる。また、併せて青銅製鋤先、黒漆塗りの容器蓋、アワビ形土製品などの特殊遺物も出土している（註15）ことから、祭祀は湧水点にまで達する大溝の掘削を契機として開始されたものと推測される。

余談になるが、溝状遺構の北20mでは、ガラス小玉を副葬した2基の小児用甕棺墓が出土しており（註16）、北400mの丘陵上には、弥生時代終末のガラス釦が副葬された東二塚遺跡（註17）も近い。長野川流域で最古の前方後円墳に位置づけられる本林崎古墳が、遺跡の南東800mに立地するなど、本遺跡群の周辺に当該流域の弥生後期～古墳前期首長墓が集中して分布することから、本

遺跡群が当該河川流域の拠点集落と考えている。

溝状遺構の北岸では径50cm以上の大きな柱穴を多数検出した。溝に隣接して大型の掘立柱建物が建てられていた可能性もあり、大溝で繰り広げられた祭祀との関係、引いては当該集落遺跡における調査地周辺エリアの集落における機能を探るうえでも注意を要する。

②出土木器（第2図5, 6, 第3図）

出土木器は少ないが、既報告資料の再掲を含め紹介する。

農具

5は、柄孔を中心に鋤の頭部である。側面が柄部から刃部に向かって直線的に伸びていることから、又鋤ではなく身幅の狭い平鋤と考えられるが、乾燥収縮が進んでおり変形が著しい。

柄頭は丸身を帯び、柄孔は長方形を呈し、3.2×6.8cmと大きい。

6は、平鋤である。実測時点で乾燥し収縮変形して小片と化していたが、出土状況写真（図版1-7）をみると、本来は釣鐘形を呈していたことが確認できたため、これをもとに不足部分を樹脂充填して旧状に復した（図版2-5）。残存長27.1cm、復元推定幅16cmを測り、着柄角度は概ね45°ほど。広鋤である。

当該地方の平鋤は、弥生中期中葉までは長方形の下駄状プランであったが、中期後半には鐘形プランの平鋤が出現しており（註18）、伴出した土器の時期と齟齬はない。

第5図1は、黒漆塗りの容器底板である。ツゲの柾目材を用いており、径8.2cm～8.3cm、厚さ9mmの円盤状に加工した板の上側縁部を幅1.7cm、約30度の勾配で斜めに削ぎ、下面は、円周に沿って幅0.9cm、深さ2mmほど縁を削って段を作り出す。

外面は全体に黒漆が塗られ、平坦面の縁に沿って筆状の工具で幅4～5mmで朱線の円文を描き中心に円点文を1個描いている。円文の筆跡をみると、轆轤や回転台などを用いて遠心力で一気に描いたのではなく、小刻みに蓋を回転させながら手描きされたことがわかる。

下面(裏側)も外縁に沿って幅2mmほどの赤彩が観察できるが、その内側では突如漆塗りが途切れ、そこには、本来接着されていた断面がコの字

形を呈する別材が接着から剥離したような痕跡が観察され、その内側にも黒漆に固められたような繊維質の素材が付着していた。容器本体の接着痕跡と考えられ、さらにその内面には、半透明の樹脂があたかも隙間からはみ出してした方に盛り上がったような状態も観察された。裏面の内側の一段盛り上がった部位では、半透明の樹脂状の塗料が付着しており、次項の所見で述べられているように、漆が塗られていたことが判明した。

図版2-8は、小型の鉤状の木製品で、全長5.1cm、頭部は2.0×1.4mmの円形を呈する。樹種はアカガシ亜属で円錐形の頭部から伸びる細い軸部の先端は針先のように尖っている。用途は不明である。

3. 自然科学的検討

—本田孝田遺跡出土の漆塗品の塗膜について—

(株)吉田生物研究所

本田孝田遺跡出土の漆塗木製品(第5図1)の表面に塗られた漆、ならびに裏面に付着した漆膜について、観察所見を以下に報告する。

それぞれに数ミリ四方の破片をサンプリングし、エポキシ樹脂に包埋し、硬化させた後、研磨を経て薄片化し、光学顕微鏡下で観察した。

まず、蓋の上面(外面)に塗られた漆膜についてであるが、下地層と漆膜が観察された(巻頭図版5-1)。

下地層：透過光下では漆黒色を呈し、大きな粒状の黒色の物質を含む(巻頭図版5-2)。漆黒色の部分は、もやもやとした雰囲気、膠着材に黒色の物質を混和したように観察される(巻頭図版5-3)。これらの物質については機器分析を行っておらず、その材質は不明である。

漆 層：文様部からサンプリングを行い、プレパラートを作製したが、下層の漆層は、透過光下では黄色を呈しており、微量の黒色顔料を含む層と含まない層に分けられる。上層の漆層には、黄色の漆層の中に赤色で筒状の形態を下パイプ状粒子のベンガラが多数認められる(巻頭図版5-4)。

次に、裏面に付着した漆様の物質についてであるが、木胎の木質繊維上に試料により1~2層の、

黄褐色の塗膜が観察される(巻頭図版5-5, 6)。木質繊維の中にもこの黄褐色の物質は認められる。塗膜の外面側は約5 μ mの幅で褐色を呈している。この塗膜を構成する物質は、その色調、そして日光(紫外線)によって劣化している点等から判断して漆である。

以上の観察所見に多少の考察を加える。まず木製品の裏面の漆膜についてであるが、表面に塗られた漆膜の層構造と比較すると木胎に直接漆が塗られている。つまり下地が施されていたという点が気になる。下地が施されていないというのは工程の省略、あるいは材料の漆の節約と解釈できる。これは、裏面の中央付近には、漆が塗られずに露胎であるという状態と符合する最後に漆の上面の漆膜についてであるが、この層構造はこれまでに調査された中国の戦国時代末期の漆器の層構造との共通点が多い。その共通点とは、下地の材料の様子、黄色味の強い漆の色調、下地層と漆層の層構造などである。

ただし、これまで調査された中国の当該期の漆器に使用されている赤色顔料は、ベンガラでなく、朱であるという点は大きく異なる。

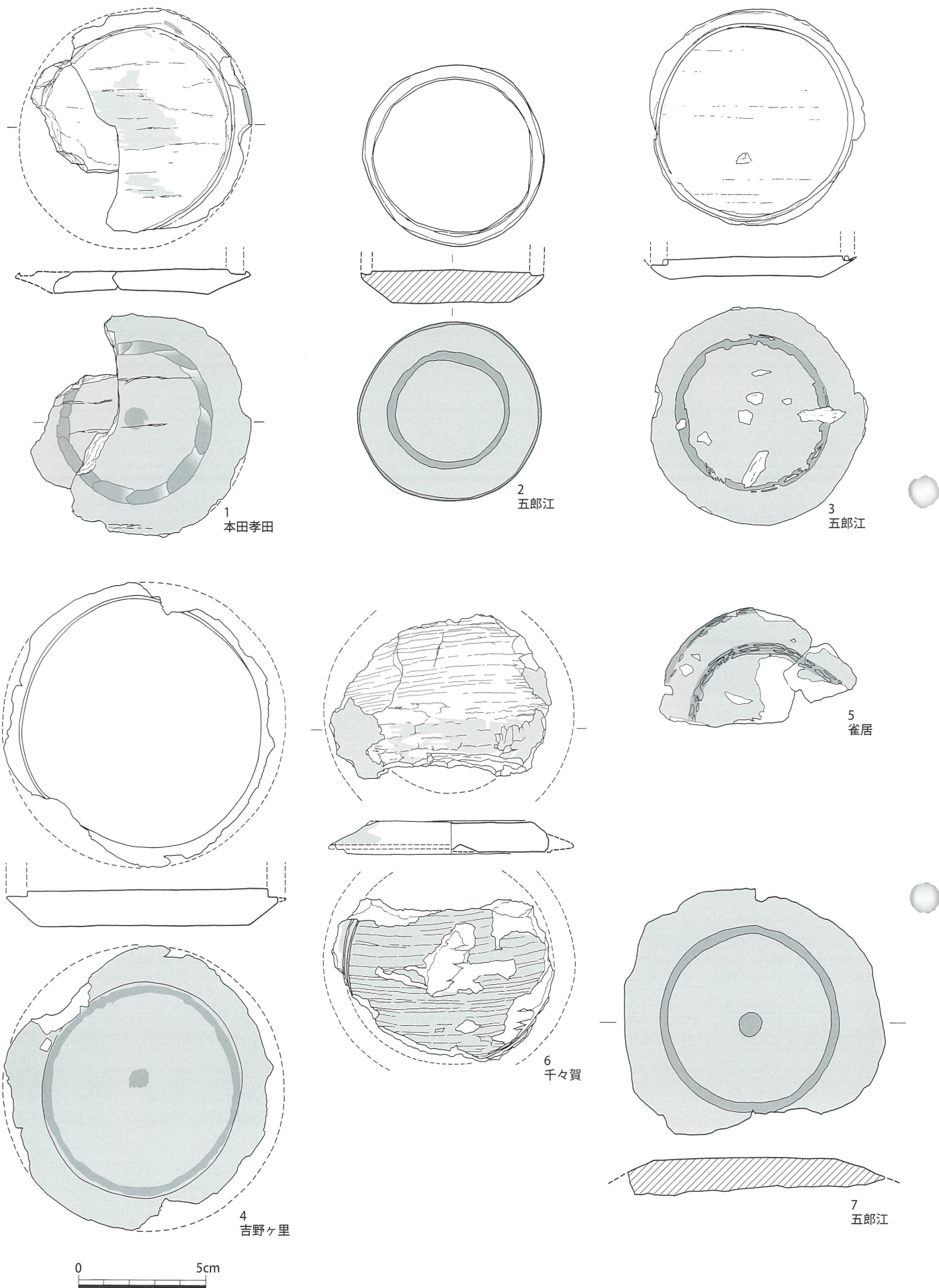
この資料と同様の器形をとる漆器は日本に限らず東アジア圏で出土している。その分布を考える上で、今後、漆器の下地の材料調査が東アジア全域を視野に入れて行われ、個々の漆器の生産地や漆器製作技術の系統が明らかになることは意義深いことだろう。(1998年12月)

4. おわりに

今回紹介した資料のなかで注目したのが本田孝田遺跡出土の漆塗り容器材である。近年、同型の資料が千々賀遺跡(註19)、吉野ヶ里遺跡(註20)、雀居遺跡(註21)今宿五郎江遺跡(註22)などから出土し、管見に触れるだけでも12例におよぶ(第5・6図、表2)。

形態的には、円形の薄板の縁辺を斜めに削り笠形に成形し、裏側縁辺部は数ミリ程度の浅い段を設ける点に共通点がある。

また、外面の基層に黒漆を塗り、赤漆の同心円文を施すことが共通する施文パターンとなっているが、千々賀遺跡資料(10)には、連続鋸歯文や放射状の細線も施されており、また中心の点文



第5図 黒漆溶器蓋集成 (1/2)

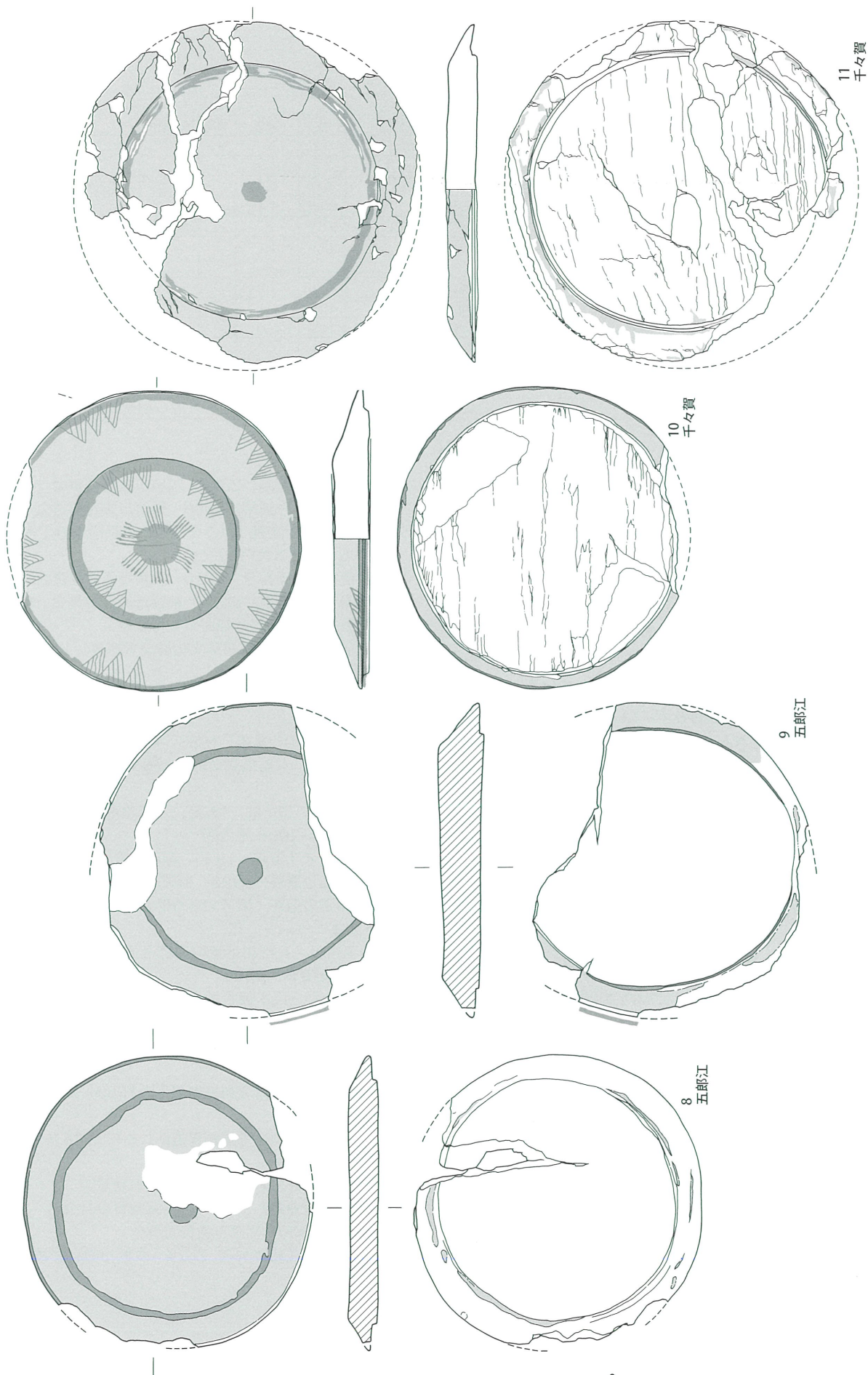


表2 漆塗笠形容器部材集成

番号	遺跡名	市町	出土遺構・層位等	時期	材質	文様構成	径	厚さ	材質	赤色顔料	備考
1	本田孝田	糸島	E-1グリッド第3層	後期前葉	底板	黒地に同心円文	8.2	9	ツゲ	ベンガラ	1/5欠損
2	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	底板	黒地に円文	7.2	1.3			
3	雀居	福岡	I区SD-02上層		底板	黒地に同心円文	8.6	0.9		ベンガラ	内面段外縁まで黒漆
4	吉野ヶ里	吉野ヶ里	225-5-F-Na14	中期～後期	底板	同心円	9.55	1.4			
5	雀居	福岡	I区SD-02上層		蓋	黒地に(同心)円文	8.5?	—		ベンガラ	半折品 内面丹塗なし
6	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	同心円	12.5	1.1			内面段外縁まで黒漆 段部に薄い黒漆
7	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	蓋	黒地に同心円文	(11.5)	1.2			
8	今宿五郎江	福岡	M1203-19層	後期	蓋	黒地に同心円文	10.6	1.1			
9	今宿五郎江	福岡	M1203-44層	後期	蓋	黒地に同心円文	11.4	1.4～1.6	クリ		
10	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	(点)一円	9.6	1.2			内面段外縁まで黒漆
11	千々賀	唐津		中期～後期	蓋	黒地に円点・放射線・ 鋸歯文・円・鋸歯・円	10.8	1.4			内面段外縁まで黒漆
12	吉野ヶ里	吉野ヶ里	237-SD308	中期～後期	蓋	同心円	11.2	1.3			実測図未報告

※番号は第5、6図遺物番号に符合する。

の有無など個体間の小差も認められる。また、法量は径7.2cmの小型品(2)から12.5cmの大型品(6)まで幅があり、大きさにおいては厳格な規格性に乏しいようである。

この木器に類する資料は、既に茶戸里遺跡(註23)、新昌洞遺跡(註24)など朝鮮半島南部の遺跡における出土が知られており、彼の地からの強い影響を受けたのものと考えられるが、一方、半島例ではつまみ状の把手がついたものが多く、赤漆による彩色施文が施されたものは認められない。千々賀例に施された連続鋸歯文は、倭人の嗜好にもとづき施された文様と考えられることから、北部九州で新たに製作されたものと考えられる。

また、出土遺跡は、いずれも各地の拠点的な集落と位置付けられていることから、漆器であることと併せ、北部九州社会における有力集団のネットワークで流通した特殊器物であることも予感させる。

なお、資料1～4では、裏面の段部分に漆などを用いて別材と接着した痕跡が認められた。7では、別材が接着したまま出土し、また、4では、接着していた容器本体表面の平行細線文が施された漆膜の出土も報告されている(註25)。

2について、報告者の杉山富雄氏は、筒形容器の底板と推定しており、今回の集成ではこの指摘を受け、接着痕を有する資料については天地逆にして底板として図化している。

しかし、もし、これらが従来の見解通り蓋であるのであれば、内容物の厳重な密閉が意図されたこととなり、収められた内容物とともに、極めて興味深い使用形態といえよう。

註

- 『元岡・桑原遺跡』2002 福岡市教育委員会
- 『泊リュウサキ遺跡』2006 前原市教育委員会
- 岡部裕俊 野田純子『みえてきた伊都国人のくらし』1995 前原市教育委員会
- 『今宿五郎江遺跡8』2010 福岡市教育委員会 他
- 『元岡・桑原遺跡』2014 福岡市教育委員会 他
- 『千里遺跡』2005 福岡市教育委員会
- 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査概要』1991 前原町教育委員会37
- 『下稗田遺跡』1990 行橋市教育委員会
- 註7に同じ
- 『拾六町ツイジ遺跡』1983 福岡市教育委員会
- 上原真人『木器集成図録』1993 奈良国立文化財研究所
- 秋山浩三「田下駄・「大足」と関連木製品」『季刊考古学104』2008 雄山閣
- 『那珂深オサ遺跡』1990 福岡市教育委員会
- 『四箇周辺遺跡』1990 福岡市教育委員会
- 『本田孝田遺跡・東スス町遺跡』1993 前原町教育委員会
- 岡部裕俊「長野川下流の遺跡と遺物」『伊都国歴史博物館紀要5』2009
- 原田大六「日本最古のガラス」糸高文林 創刊号 糸島高校1950
- 今宿五郎江遺跡では、中期後半の鐘形の平鍬が出土している。
- 『義昌茶戸里遺跡発掘進展報告』1989 韓国考古美術研究所
- 『光州新昌洞低湿地遺跡IV遺跡』2002 国立光州博物館
- 『千々賀遺跡』2000 唐津市教育委員会
- 『吉野ヶ里遺跡』2000 佐賀県教育委員会
- 『雀居』2000 福岡市教育委員会
- 『今宿五郎江遺跡16』2014 福岡市教育委員会
- 註22に同じ



1. 池田中上町遺跡自然流路の木器溜り



2. 池田大五郎遺跡調査区全景



3. 池田大五郎遺跡木器出土状況



4. 池田大五郎遺跡平鍬状木器出土状況近景



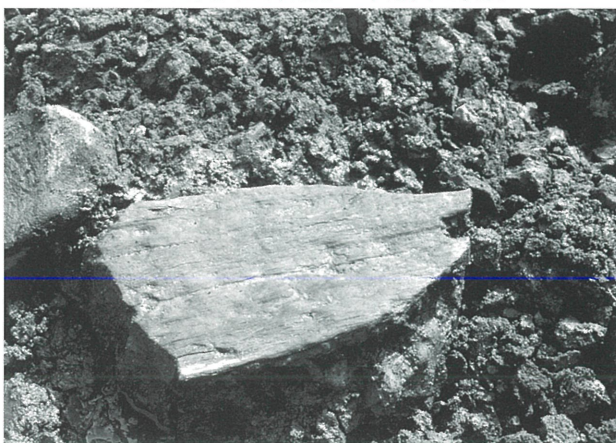
5. 池田大五郎遺跡二又鍬出土状況



6. 池田大五郎遺跡一木鋤出土状況



7. 本田孝田遺跡溝状遺構全景



8. 本田孝田遺跡平鍬出土状況

